

原 著

理学療法学科学生の性別における 職業興味傾向についての検討 (VPI 職業興味検査を用いて)

An Analysis of the Vocational Preference of Physical Therapy
Majors on a Gender Basis: Using the Vocational Preference Inventory

越智 淳子

Junko OCHI

日高 正巳

Masami HIDAKA

吉村 晴香

Haluka YOSHIMURA

川口 浩太郎

Kotaro KAWAGUCHI

抄録

理学療法士を目指す理学療法学科在籍の学生を対象に、職業興味に対する検査を用い、性別による職業興味領域の特徴における差異を検討した。6つの職業領域に対する興味について、性別による明らかな差は認められず、また、男女ともに関心・興味の高い、あるいは関心の低い職業領域が認められないことから職業興味の未分化が示された。しかし、男子ではSER（社会的、企業的、現実的）、女子ではRAS（現実的、芸術的、社会的）と、異なる職業興味パターンを示した。

キーワード ■ VPI 職業興味傾向, 性別差, 理学療法

1 はじめに

大学生に対する進路指導、就職ガイダンスを行ううえで、個々の職業に対する興味の特徴、職業認知における特徴を理解することは重要なこととされている。その職業指導のツールの一つとして、VPI 職業興味検査がある。このVPI 職業興味検査の原版は、アメリカのジョン L. ホランド (John L. Holland) によって開発されたVPI (Vocational Preference Inventory, 初版1953年) の1978年版であり、その後、日本向きに翻案されたものである¹⁾。

この VPI 職業興味検査では、個人の職業興味領域に対する興味、関心の強さを測定することが出来、公表以降、国内では多用されており、理学療法士を目指す学生を対象とした報告もなされている。しかしながら、理学療法養成校におけるこれまでの報告²⁻⁵⁾では、学生をひとつの集団と捉え実施されており、性別に対する検討は行われていない。

VPI は、その開発にあたりアメリカ人大学生を対象とした研究⁶⁾においても、また日本人への適応を検討するにあたり日本人大学生を対象とした研究⁷⁾においても、いずれも職業興味領域には、性差があることが示されている。

そこで本研究では、理学療法士を目指す理学療法学科学生を対象に、VPI 職業興味検査を用い、性別による職業興味領域の特徴の差異を検討した。

2 対象

検査の実施に先立ち、本研究の目的、検査方法を説明し同意を得た、理学療法学科在籍の大学 2 回生 30 名（男子 18 名、女子 12 名）を対象とした。年齢は、平均 19.4 ± 0.6 歳（男子 19.5 ± 0.6 歳、女子 19.3 ± 0.5 歳）であった。検査の実施にあたっては、佛教大学倫理審査委員会の承認を受け実施した。

3 方法

(1) 検査内容

検査には VPI (Vocational Preference Inventory) 職業興味検査（第 3 版）を用いた。これは 160 の具体的な職業に対する興味・関心の有無を回答することにより、6 種の職業興味領域に対する個人の興味、関心の強さを測定するものである。6 種の職業興味領域は、① R 尺度 (Realistic Scale：現実的興味領域)、② I 尺度 (Investigative Scale：研究的興味領域)、③ A 尺度 (Artistic Scale：芸術的興味領域)、④ S 尺度 (Social Scale：社会的興味領域)、⑤ E 尺度 (Enterprising Scale：企業的興味領域)、⑥ C 尺度 (Conventional Scale：慣習的興味領域) で示される（表 1）。この 6 領域はひとつのセットとなっており、職業の領域と個人のタイプを関連づけるように作成されている。

なお、VPI 職業興味検査では、この職業興味領域の測定と同時に、個人の心理的傾向についても検査が実施されるが、この傾向尺度は、興味領域尺度との関連性について解釈するものではない検査であるため、本研究では興味領域の尺度についてのみの検討を行う。

(2) 処理方法

VPI 職業興味検査で得られた素点は、検査手引きに従って、興味尺度領域のパーセンタイル

順位（基準集団の中での個人の位置づけ）に換算し、各尺度の平均値を求めた。また、興味領域尺度は、職業興味の最も強い領域（パーセンタイル順位値の上位）から順に3つの記号を並べ、それを被験者の「興味パターン」とする。

各尺度の比較の組み合わせにおいて、まず、Shapiro-Wilk 検定を用いて正規性の確認を行い、両群共に正規性が仮定できると判断できた場合には2標本t検定を、いずれかの群において正規性の仮定が否定された場合には、Mann-Whitney のU検定を用いた。有意水準は5%に設定した。統計解析ソフトにはIBM SPSS Statistic19を使用した。

表1 VPI 職業興味尺度における興味尺度の種類と内容

<p>興味領域尺度</p> <p>①R尺度（現実的興味領域） 機械や物を対象とする具体的で実際的な仕事や活動に対する好みや関心の強さを示す。</p> <p>②I尺度（研究的興味領域） 研究や調査などのような研究的、探索的な仕事や活動に対する好み関心の強さを示す。</p> <p>③A尺度（芸術的興味領域） 音楽、美術、文芸など芸術的領域での仕事や活動に対する好みや関心の強さを示す。</p> <p>④S尺度（社会的興味領域） 人に接したり、奉仕したりする仕事や活動に対する好みや関心の強さを示す。</p> <p>⑤E尺度（企業的興味領域） 企画や組織運営、経営などのような仕事や活動に対する好みや関心の強さを示す。</p> <p>⑥C尺度（慣習的興味領域） 定まった方式や規則に従って行動するような仕事や活動に対する好みや関心の強さを示す。</p>

4 結果

(1) 全体での平均パーセンタイル順位（表2, 図1）

R（現実的）：43.3, I（研究的）：34.2, A（芸術的）：35.0, S（社会的）：44.9, E（企業的）：33.4, C（慣習的）：27.2 となった。興味パターンは、SRA（社会的, 現実的, 芸術的）であった。

(2) 男子の平均パーセンタイル順位（表2, 図2）

男子では R：37.5, I：34.0, A：34.2, S：51.1, E：38.2, C：29.1 となり、SER（社会的, 企業的, 現実的）のパターンを示した。

（3）女子の平均パーセンタイル順位（表 2，図 2）

女子では，R：52.0，I：34.5，A：36.2，S：35.5，E：26.3，C：24.3 となり，RAS（現実的，芸術的，社会的）のパターンを示した。

（4）性別差について（表 2）

6 領域の尺度それぞれに対して，男女での比較では，いずれの尺度においても有意な差は認められなかった。

表 2 職業興味領域尺度の平均パーセンタイル順位

全体		性別		p 値 (男性 vs 女性)
R（現実的）	43.3 ± 24.9	男	37.5 ± 24.3	0.146
		女	52.0 ± 24.1	
I（研究的）	34.2 ± 26.1	男	34.0 ± 25.0	0.392
		女	34.5 ± 28.8	
A（芸術的）	35.0 ± 22.4	男	34.2 ± 24.9	0.778
		女	36.2 ± 19.4	
S（社会的）	33.4 ± 23.9	男	51.1 ± 24.9	0.413
		女	35.5 ± 24.8	
E（企業的）	27.2 ± 24.2	男	38.2 ± 29.4	0.490
		女	26.3 ± 8.66	
C（慣習的）	27.2 ± 24.2	男	29.1 ± 26.6	0.103
		女	24.3 ± 20.6	

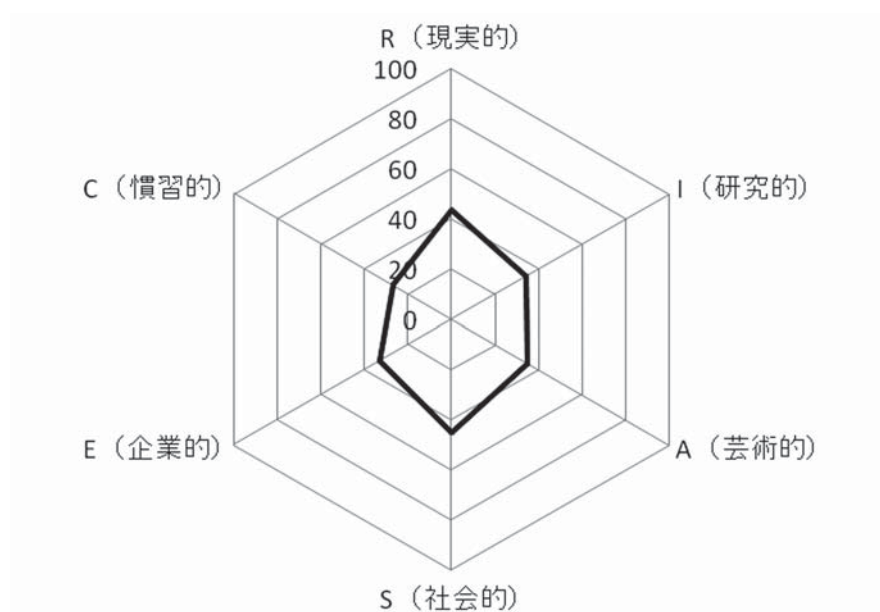


図 1 被験者全体における職業興味領域における興味の六角形（n = 30）
各領域の平均パーセンタイル順位をグラフ内に記入し，線で結ぶ

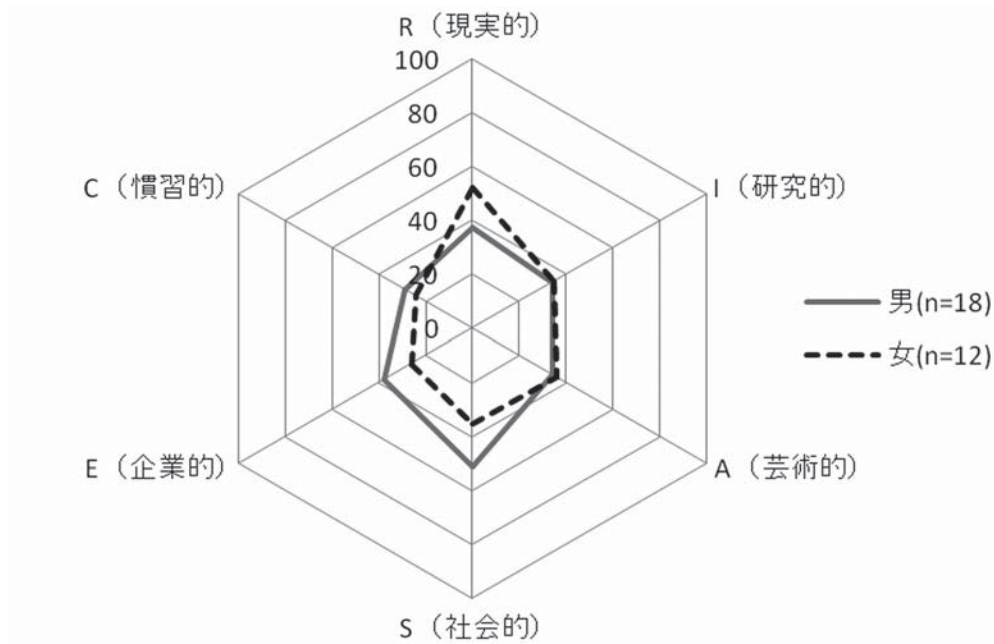


図2 男女別の職業興味領域における興味の六角形

5 考察

本学科には、理学療法士という将来の職業選択を行った大学生が在籍しているが、就学上の問題（留年、休学、進路変更・退学）を抱える学生の中には、専門領域の学修に不適応を示す者も少なからずいる。これは、高校生の段階で職業選択を行うことや、進路を考える際に何らかの資格取得を主目的とし自分の成績に合わせた大学・学部選びをすることなど、職業選択の方法や時期、職業適正に対する認識の希薄さが、学修不適応を起こす要因の一つと考えられる。このことから、大学入学後の学生の職業に対する興味の特徴、職業認知における特徴を理解することは、学生生活の中での学習指導、進路相談を行ううえで重要なことである。

職業に対する興味の特徴を理解するためのひとつの方法として、VPI 職業興味検査がある。これまでもこの検査を用いて、理学療法学科在籍の学生における職業興味について、いくつかの報告がなされている。しかし、これまでの報告では対象者を男女混合としていたことから、性差による検討は行われていない。本研究では、理学療法学科専攻学生の、職業興味に対する性別差について、VPI 職業興味検査を用いて検討を行った。

(1) 理学療法養成学校における職業興味傾向についての先行研究

職業興味検査は、本来、大学生等における職業に対する自己理解を深め、望ましい職業的探索や職業選択活動を促進するための動機づけや情報を提供することを目的とし、検査によって得られた学生個々の職業興味に対する傾向から、職域や職種の探索を行うものである。本学部・学科のように、大学入学時に既に将来の職業を決定している学生に対して、この検査を用

いた場合、職業興味傾向は、目標とする職域・職業の興味パターンに類似した傾向を示すことが予測される。つまり理学療法士であれば、VPI 職業興味検査においては、SIR（社会的、研究的、現実的）パターンを示す職種の一つとされており、検査結果もこれに類似したパターンを示すのではないかと予測される。

これまでの研究では、大学理学療法学科在籍の1回生を対象と単年度の検査を行った結果、SIA（社会的、研究的、芸術的）のパターンを示し²⁾、複数年度（3年間）にわたる1回生を対象とした場合では、RSI（現実的、社会的、研究的）のパターンを示したと報告³⁾している。また、内田ら⁴⁾は、大学理学療法学科の同一大学生を対象とし、3年間の縦断的調査をおこなった場合、1回生次ではRSI（現実的、社会的、研究的）、2回生次ではSAR（社会的、芸術的、現実的）、3回生次SIR（社会的、研究的、現実的）と、興味領域もパターンともに変化したことを報告している。

このように理学療法士を目指す学生を対象とした先行研究では、それぞれが異なる結果を示しており、また本研究においても、被験者全体では、SRA（社会的、現実的、芸術的）のパターン（図1）を示した。これらの結果からは、専門領域（理学療法）を目指す学科に在籍しているからと言って必ずしも、理学療法士が持つ興味領域に関心が強い、といった簡単なものではないことがわかる。

しかし、これらの結果はいずれも対象者を男女混合としており、性別による検討は行われていないため、性別を分けた場合の解釈においては留意することが必要である。

（2）職業興味検査における性差

VPI 職業興味検査の日本国内での公表（昭和60年）に先立ち、渡辺ら⁷⁾は、日本人大学生へのVPIの適応に関する研究を行っている。その中で、共学大学の大学生を対象とした調査によって性差についての検討を行っている。複数の専攻分野（文学部、理工学部、法学部、経済学部）の学生を対象とした場合、現実的（R）、研究的（I）、企業的（E）の領域は男子が女子よりも有意に高い値を示し、社会的（S）、芸術的（A）の領域は、女子が男子よりも有意に高いという結果を報告している。また、対象とする大学生の専攻分野を増やした場合（文学部、法学部、社会学部、経済学部、教育学部、理学部、医学部、歯学部）における報告⁸⁾でも、現実的（R）、企業的（E）の領域は男子が有意に高く、社会的（S）、慣習的（C）、芸術的（A）の領域は女子が有意に高い結果であり、いずれも、職業興味に性差があることが示されている。また、VPI 職業興味検査とは異なる職業興味検査を用いた研究⁹⁾においても、複数学部（経済学部、法学部、商学部、理工学部）の大学生を対象とし、性差を検討した結果、全ての学部（経済学部、法学部、商学部、理工学部）において性差が認められたと報告されている。

医療職種のひとつである看護学生を対象とし男女の比較を行った研究¹⁰⁾では、男子学生の上位3領域は、RSC（現実的、社会的、慣習的）、女子学生では、RSI（現実的、社会的、研

究的)という結果を報告している。この研究では、上位2領域(R, S)は男女同じ傾向を示し、「看護学生に特徴的なもの」としている。

これらの報告から、VPI職業興味検査では、職業興味領域に性差が有る場合と、同じ職業領域を目指す学生では、性別に関係なく似た職業興味領域の示す場合があることが示されており、検査に際しては、性別による差異を考慮する必要がある。

(3) 本研究における職業興味検査の性別差

1) 男女それぞれの職業興味傾向 (図2)

男女がそれぞれ異なるパターンとなり、男子ではSER(社会的, 企業的, 現実的)のパターンを示した。これは、人を援助したり人と一緒に活動することを好み(S), 企画や運営などのような仕事に興味を持ち(E), また、具体的な仕事や活動に対する興味もある(R)とされる。女子ではRAS(現実的, 芸術的, 社会的)のパターンを示した。このパターンは、具体的な仕事や活動、つまり機械や物に対する関心が強かったり(R), 型にはまることを嫌い自分の感性や独自性を大切に(A), また、人を援助したり、人と一緒に活動することを好む(S)とされる。

VPI職業興味検査では、パーセンタイル順位が85以上を「高い」、16～84を「普通」、15以下を「低い」と判断するが、男子におけるそれぞれの尺度の平均パーセンタイル順位は、S(社会的, 51.1 ± 24.9)を除く5尺度がいずれも40以下であり、また、女子においても、R(現実的, 52.0 ± 24.1)以外の尺度は、40以下に留まった。このことから、男女ともに、職業興味傾向として、職業認知に大きな偏りがなく、いろいろな領域に興味を持っているが、特別に興味・関心を示す、あるいは特別に関心が無いといった興味領域が無いことが伺える。つまり職業興味未分化であることが示唆された。

また、VPI職業興味検査において理学療法士は、SIR(社会的, 研究的, 現実的)パターンを示す職種の一つとされているが、本研究では男女のいずれにおいても、このパターンとは異なる結果となり、既に将来の職業を理学療法士と決定し、大学に在籍しているからといって必ずしも、理学療法士という職業に対して強い興味を持っているわけではないことが示された。

2) 男女の比較

職業興味検査に用いる「興味の六角形」(図1, 2)は、各領域のパーセンタイル順位をグラフ内に記入し、線で結んだものである。この六角形において、パーセンタイル順位の高い上位2領域が六角形上で隣接している場合は、興味に「一貫性がある」、一つとんで位置している場合は「平均的である」、対極に位置している場合は「一貫性がない」と捉える。

これまでの報告と同様に、男女の区別無く一つ集団として検討した場合、図1のように、SRA(社会的, 現実的, 芸術的)のパターンを示す。興味の六角形で見た場合、上位二尺度(S, R)は対極に位置しており、対象者の興味領域には一貫性がない、と見ることが出来る。

しかし、男女それぞれに分けた場合の興味の六角形を見ると、男子における興味領域の上位2つの領域であるS（社会的）とE（企業的）は隣接しており、また、女子では、R（現実的）A（芸術的）が一つ間隔となっている。これは、本研究での対象者においては、男女がそれぞれに、ある一定の興味領域の傾向があり、職業興味に男子の特性、女子の特性があることが示唆された。つまり、対象者全体を一つの集団として見た場合の、興味に「一貫性がない」（興味を示す領域が対極を成す）という結果となった要因には、男性の興味領域、女性の興味領域、それぞれの特性が混在しているためである。

以上のように、本研究における理学療法学科在籍の学生については、各興味尺度において男女の有意な差は認められず、また、職業興味が未分化であることは男女ともに共通する結果であった。しかし、男子では、社会的興味領域（S）、女子では現実的興味領域（R）が上位の領域となり、性別によって異なる職業興味パターンを示した。このことから、同じ職業を目指していても職業興味・認知の特徴については、個々の特性はもちろん、性別の特性があり、これを考慮したうえでの学習指導、進路指導が必要になることが示唆された。

まとめ

- ・理学療法学科所属の学生を対象に、職業興味領域について性差の有無を検討した。
- ・6つの職業領域に対する興味について、明らかな性別差は認められず、また男女いずれも高得点を示す職業領域が認められないことから職業興味の未分化が示された。
- ・男子のみではSER（社会的、企業的、現実的）、女子のみではRAS（現実的、芸術的、社会的）と、異なる興味パターンを示した。対象者全体でのパターンではSRA（社会的、現実的、芸術的）となり、興味の一貫性が無いと見ることが出来るが、これは男女の興味特性が混在したものと考えられた。

引用文献

- 1) 独立行政法人労働政策研究・研修機構（日本版著書）原著者 J.L.Holland：VPI 職業興味検査（第3版）手引。社団法人雇用問題研究会東京。2009.
- 2) 沖田一彦，菅原憲一・他：理学療法学科学生の職業興味特性の分析－VPI 職業興味検査の結果より－。理学療法学。23：519，1996.
- 3) 越智淳子，沖田一彦・他：理学療法学科学生の職業興味特性の分析－3年間のVPI 職業興味検査の結果より－。理学療法学。27：260，2000.
- 4) 内田賢一，菅原憲一・他：理学療法学科専攻学生の職業志向性の変化－VPI 職業興味検査を用いて－。理学療法学。33：466，2006.
- 5) 内田賢一，藤田峰子・他：理学療法学科専攻に入学した学生のVPI（Vocational Preference Inventory）職業興味検査による理学療法士としての適正に関する分析。神奈川県立保

健福祉大学誌. 4 (1) : 37-43, 2007.

- 6) Holland, J.L., Whitney, D.R., et al. : An empirical occupational classification derived from a theory of personality and intended for practice and research. ACT Research Report No.29. Iowa City : The American College Testing Program. 1969
- 7) 渡辺三枝子, 松本純平・他 : Holland の職業選択理論の日本人大学生への適用に関する研究 (1). 日本進路指導学会研究紀要. 3 : 2-9, 1982.
- 8) 渡辺 三枝子, 館暁夫・他 : 日本版 VPI の開発に関する基礎的研究 5. パーソナリティ・タイプにおける性及び学部の効果について. 日本教育心理学会総会発表論文集. 26 : 370-371, 1984.
- 9) 坂爪洋美 他 : 大学生の職業興味の特徴と安定性の検討 : 性差ならびに所属学部による違い. 経営行動科学学会年次大会 : 発表論文集. 3 : 138-143, 2010.
- 10) 近藤裕子, 白井瑞子・他 : 看護学生の職業興味領域の検討 : 男女学生の比較. 香川医科大学看護学雑誌 7 (1) : 49-53, 2003.

参考文献

- 1) VPI 研究会 VPI 利用者のための職業ガイド. 株式会社日本文化科学社. 東京. 2005.
- 2) 菲澤力 他 : 理学療法学科 2 年次生の職業興味と臨床実習との関連について. 理学療法学. 34 : 202, 2007.
- 3) 近藤裕子 他 : VPI 職業興味調査による看護短大生の職業興味領域に関する縦断調査. 香川医科大学看護雑誌. 3 (1) : 5-9, 1999.
- 4) 編) W.M. ウィリアムズ, 訳) 吉井弘 : 職業選択の倫理社会学的倫理を目指して. 誠信書房. 東京. 1983.

(おち じゅんこ 保健医療技術学部理学療法学科)

(よしむら はるか 保健医療技術実習センター)

(ひだか まさみ 兵庫医療大学)

(かわぐち こうたろう 兵庫医療大学)

2011 年 9 月 30 日受理

